

いい本 みつけた！

小学校4～6年生



生駒市図書館

『大きな森の小さな家』

ローラ・インカルス・ワイルダー/作
恩地三保子/訳 ガース・ウィリアムズ、画
福音館書店 1972 256p 1,600円 (インカルス一家の物語)

626



大きな森の小さな丸太小屋に住む5歳のローラは、好奇心旺盛な女の子。周囲に家も道もない大自然の中、両親と姉、妹の5人で暮らしている。父さんは狩りや森の開墾、母さんは炊事や洗濯、バターやチーズ作り等で忙しい。ローラも姉と一緒にできることは手伝った。ローラにとって一番楽しいのは冬の夜、父さんがヴァイオリンを弾いて歌ったり、お話をしてくれたりするひとときだ。寒さが戻った春の朝、父さんが「砂糖雪だよ」と言うので、ローラは嵐でもみか水の水の味しかなかった。父さんは春先に雪が降るとかみか水の味しかなかったから、この季節の雪を砂糖雪と呼ぶのだと教えてくれるのだった。100年以上も昔のアメリカを舞台に、開拓生活の中で成長していく少女とその家族を描いた著者の自伝的物語。両親の愛に満ちた素朴で温かい一家の暮らしが、四季を通じてありのままに語られ、読者はローラの体験を通して、自然の厳しさや生きる喜びを感じるだろう。続編として『大草原の小さな家』『プラム・ツリークの上で』『シルバー・レイクの岸辺で』『農場の少年』が同社から、その続きを描いた『長い冬』『大草原の小さな町』『この楽しい日々』『はじめの四年間』『わが家への道—ローラの旅日記』が岩波書店(岩波少年文庫新版は谷口由美子訳)から出版されている。



『おじいさんのランプ—新美南吉童話集—』

新美南吉/作 赤羽末吉、鈴木義治/画
岩波書店 1965 344p 入手不可



町で初めてランプのあかりを見た巳之助は、「文明開化だ」と感動し、村に帰ってランプ商売を始め成功する。時は流れ、町では電燈が出回り始めるが、今度は、巳之助が新しい文明の利器を受け入れられない。その後、古い商売に固執することは誤りだったと悟った巳之助は、全てのランプを池のふちの木につらし、1つ1つに石を投げて割っていき、深くランプ商売を終える。この表題作の他、子どもの信頼が盗人を改心させる「花のきり」と「盗人たち」や、幼い子向き「てぶくろを買いに」等を収録。著者の故郷知多半島を舞台に庶民に庶民人間味豊かな作品が多い。岩波少年文庫の書名は『ごんぎつね』。

『オズの魔法使い』

L・F・パウム/作 渡辺茂男/訳 W・W・デンスロウ/画
福音館書店 1990 320p 2,500円 (福音館古典童話シリーズ)



カンザスの大草原に住む女の子ドロシーは、ある日、大竜巻に巻き上げられ、自分と同じほどの背丈で奇妙な服装をしたマンチキンたちの国に降り立つ。カンザスへ帰りたいドロシーは、願いを叶えてもらうため、オズ大王に会いにエメラルドの都へと冒険の旅に出る。途中出会った脳みそのないかしら、植物のライオン、心臓のないブリキのきこりとり方を合わせ、無事に都へたどり着いたドロシーだったが……。デザイン性豊かな絵は、国ごとに色づかいを変える巧みな趣向と相まって、読者を物語に引き込む。陽気なアメリカ人気質を感じさせる明るさとユーモアにあふれるファンタジー。

『オタパリの少年探偵たち』

セシル・デイ・ルイス/作 瀬田貞二/訳 E・アーディゾーニ/さしえ
岩波書店 1957 254p 入手不可 (岩波少年文庫)

オタパリの少年探偵たち



オタパリ市に住む少年たちは、2派に分かれて戦争ごっこばかり。そんなある日、ニックが蹴ったボールが校舎の窓を割り、弁償するはめに、リーダー格のテッドが皆で弁償しようと言い出し、2派は休戦して、靴みがきや窓みかきをしてお金を集めた。ところが、テッドが預かっていたお金が、鍵をかけた箱の中からなくなってしまう。ジョージやニックが彼の無実を証明しようとして、調査し始めたところ、町のチャンピオンの怪しい行動が浮かび上がってきて……。少年たちが大人顔負けの行動力で推理したり、証拠を探したりと活躍する物語。確かな友情と正義が勝つ結末が、爽快な読後感をもたらす。

『シャーロットのおくりもの』

E・B・ホワイト/作
さくまゆみこ/訳 ガース・ウィリアムズ/絵
あすなろ書房 2001 223p 1,500円

69-2



子ブタのウィルバーは、生まれた時に体が小さく、殺されそうになったところを、少女ファーンに助けられ、大切に育てられる。丈夫になったウィルバーは農場に引き取られ、クモのシャーロットという親友もでき、楽しい毎日を送っていたが、冬になるとハムにされると聞いてショックを受ける。シャーロットは彼を助けようと、知恵をよぼせて思いもかけない作戦を実行する。自然豊かな農場で、個性的な登場人物が大騒動を巻き起こす愉快な物語。無邪気なウィルバーと誠実なシャーロットの互いに対する深い尊敬や友情が胸を打つ。法政大学出版局版（鈴木哲子訳 1973年）の復刊。

『ジャングル・ブック』

R・キャプリング/作 木島祐/訳 石川勇/画
福音館書店 1979 492p 2,300円（福音館古典童話シリーズ）



インドのジャングルに置き去りにされた人間の赤ん坊モーグリは、狼の仲間入りをすることになった。そして親狼や年寄り熊のバルー、黒豹のバギーたちに見守られ、たくましくしなやかに成長していく。無法者の虎を殺したり、人間の村から火を盗んだり冒険は続くが、やがて17歳の春にモーグリは、生みの母のもとに帰っていく。インド生まれの作者が描く野生生活は東洋の神祕に満ち、動物たちの歌はジャングルでの噂を聞いているよう。人間であることを捨てられず人間世界に戻って行くモーグリと、彼に深い愛情を抱くバギーとの別れは、種を越えた共存の世界との別れでもあるだろう。

『小公子』

バーネット/作 吉田甲子太郎/訳 レジナルド・B・バーチ/さし絵
岩波書店 1986[1953] 366p 入手不可（岩波少年文庫）



セドリックは、アメリカの下町で暮らす7歳の男子。父親は亡くなっていて、人柄の良い美しい母親のもとで素直な模範子に育った。ある日、イギリスから伯爵家の使いが来て、父の代わりにセドリックを後継者にすると告げた。海を渡ったセドリックは、祖父である伯爵に会ったことを無邪気に喜ぶが、伯爵は自分勝手に気が高く、アメリカ人であるセドリックの母親を嫌っていた。セドリックの深い思いやりによって、嫌われている伯爵に会った伯爵の心にも生まれた愛情は、やがてセドリックの母や村の人たちへも向けられてゆく。1879年に日本に紹介されて以来、人々に愛され続けている作品。

『小公女』

バーネット/作 吉田勝江/訳 レジナルド・B・バーチ/さし絵
岩波書店 1986[1954] 398p 入手不可（岩波少年文庫）



インドで育ったセーラは、7歳の時、大好きな父と離れてロンドンにあるミンチン女史の寄宿学校に入る。欲深いミンチン先生は、金持の父を持ち、綺麗な服を身に着ているセーラを特別扱いした。そのことをなむももいたが、傲慢なところがなく親切なセーラは誰からも慕われる。ところが、父が事業に失敗し病気で亡くなると、セーラの生活は一転。屋根裏部屋に追いやり、女中のようにこき使われる。どんな境遇にあっても自尊心を失わず、豊かな想像力を活かして前向きに生きるセーラ。魅力的な主人公とドラマチックなストーリーは、いつの時代も少女の心をとらえてはなさない。

『少女ボリアンナ』

エリナー・ボーター/作 谷口由美子/訳 高田美苗/さし絵
岩波書店 2002 370p 760円（岩波少年文庫）



11歳の少女ボリアンナは、牧師の父を亡くし、叔母のミス・ボリーに引き取られることになった。天真爛漫なボリアンナは、幼い頃から父と一緒にどんなに悲しいことにも何かしら喜びを見つけようとする“ゲーム”を楽しんできた。そんなボリアンナは、新しい暮らしの中で出会った人々——義務感のみで彼女を引き取った叔母や、周りの人間を寄せ付けない孤獨な資産家等々——にも“ゲーム”の楽しさを伝えることによって彼らの頑なな心を次第に和ませた。困難な時も常に明るく前向きな主人公の姿に、生きる喜びと勇気を与えられる作品。続編に『ボリアンナの青春』がある。

『女王の鼻』

ディック・キングスミス/作 宮下嶺夫/訳 ジル・ベネット/絵
評論社 1994 179p 1,600円



10歳のハーモニーは、両親と姉に動物を飼うことを反対され、腹いせに家族を動物に見立てた絵を描いていた。唯一の気の合うおじさんがくれたコインはなぜか鼻を壊した紙で包まれていた。謎には魔法のコインの使い方が秘められていて、7つの願いが叶えられることがわかる。腕時計、自転車と、次々に望むものを手に入れるハーモニーだったが、身勝手な6つ目の願いが思わぬ結果を招いて……。孤立して思い込んでいたハーモニーが、騒動を通して家族の愛情に触れ、家族に対する見方を変えていく。わかりあえた幸福感で満たされる結末がうれしい。読後に思わず魔法のコインを探したくなる。

『魔女がいっぱい』

清水建也、鶴見敏/訳 ケンティン・ブレイク/絵
評論社 1987 302p 1,300円



魔女は誰でも子どもが大嫌い。どんな時も子どもを消そうとたくらんでいる。魔女には気をつけるように——魔法研究家だったおばあちゃんにそう教えられていた“ぼく”だったが、年に1度の魔女集会上に偶然にも紛れ込んでしまう。そこに現れた大魔女は、美しい仮面をはずして恐ろしい素顔をさらし、毒薬“時限ネズミナール”でイギリス中の子どもたちをネズミに変えてしまう計画を発表した。ユニークな着想、奇想天外なストーリー、そして斬新で意表をつく結末が魅力の作品。今にも動き出しそうなブレイクの挿絵は、ユーモラスで少々不気味で、そのうえ話にぴったりと合っている。

『マチルダはちいさな大天才』

ロアルド・ダール/作 宮下嶺夫/訳 ケンティン・ブレイク/絵
評論社 1991 332p 入手不可



マチルダはまだ4才だが、大人の本もすらすら読める大天才だった。しかし両親はマチルダに関心が無く、いつも気持ちを踏みにじるようなことを言ってばかり。そこでマチルダは我慢の限界を越える度に、いたずらをして仕返しをしていた。小学校にあがると、担任のミス・ハニーがマチルダの才能に気づき、良き相談相手になってくれた。ところが、校長先生は図体でかいばかりで、生徒を恐怖で押さえ付け、ミス・ハニーのこともいじめていた。不思議な念力や身につけたマチルダは、それを活かしてミス・ハニーを助けようとする。悪い大人を小さな子どもがこてんぱんにやっつける痛快な物語。

『魔法使いのチョコレート・ケーキ マーガレット・マーヒーお話集』

マーガレット・マーヒー/作 石井桃子/訳 シャーリー・ヒューズ/画
福音館書店 1984 184p 1,600円



魔法の腕はさっぱりだが、チョコレート・ケーキを作るのは得意な魔法使いが、町中の子どもたちをパーティーに招待する。ところが、誰も来てくれなかった。で、仕方なくりんごの木と一緒に抹茶を飲むうち、長い年月が流れ……。この表題作の他、「葉っぱの魔法」「遊園地」等、子どもたちの日常に魔法の力が働いて素敵なことが起ころ話や、少し怖い「幽霊をさがす」等、8つの短編と2つの詩が収められている。

想像力豊かな作者が生み出したお話の世界はどれも独自の、いつも不思議を探し求めている子どもたちの心を十分に満たしてくれる。

『魔法のオレンジの木 ―ハイチの民話』

ダイアン・ウォルクスタイン/採話
清水真砂子/訳 エルサ・エンリケス/さし絵
岩波書店 1984 256p 入手不可



ハイチでは、話し手の「クリーク?」の問いかけに、聞き手が「クラク!」と応じなければ、話を始めることができない。これは、著者が現地地で採集した民話を、その背景や語りの様子と合わせて紹介した民話集。

ある日、テーブルのオレンジを全部食べてしまったのを継母に見つかった娘は逃げ出し、生みの親の墓前で一晩中泣いて助けを乞う。次の朝、娘のスカートから落ちたオレンジの種が、土の中にもぐり込み、緑の葉っぱを伸ばし始める……。この表題作の他、「二頭のロバ」「フクロウ」等、赤道直下の国らしい、開放的で生き生きとした歌とお話を楽しめる。

『まぼろしの小さい犬』

フィリパ・ヒアス/作 猪熊葉子/訳 アントニー・メイトランド/さし絵
岩波書店 1989 242p 1,800円



ベンは年が離れた5人姉弟の真ん中で、孤独な日々を送っており、寂しさを埋めるために犬がほしいと思いつけてきた。そんなベンに祖父は、誕生日に犬をよそ約束してくれて、当日送られてきたのは1枚の犬の絵だった。期待を裏切られ、うちのめされたベンは、やがて目をつぶった時にだけ見える想像の犬を飼ひ上げ、自分だけの世界に入り込んでいく。犬への渴望、自分の居場所を見つけれない虚しさ等、少年の心を繊細に余す所なく描いている。理想と現実の間で、苦しみながらも、自らの強い決断で幸せをつかむ姿に、読者は深い感動を得るだろう。1970年学習研究社版の復刊。

『まぼろしの白馬』

エリザベス・ケージ/作 石井桃子/訳 ウォルター・ホッジス/さし絵
岩波書店 2007[1997] 330p 720円 (岩波少年文庫)



孤児となったマリアは、家庭教師のペリオトロープ先生とともに、古い領土館に住む従兄ベンジャミン卿のもとに身を寄せる。卿はマリアを深層で勇敢なメリウエザー家の一員と見て取り温かく迎え入れる。奇才の料理人マーマチュクや、眠っている間に小さなドアを開けて来ては衣裳を調えてくれる謎の人物に見守られ、マリアは満ち足りた日々を送るが……。他にも不思議な少年ロビンや風変わりな老牧師等、魅力的な人物を配し、その逸話をストーリーに絡める巧みな構成で読み手の興味をそらさない。皆に訪れる幸せな結末が読者を晴れやかな気持ちにさせる。1964年あかね書房版の復刊。

『森は生きている』

サムイル・マルシャーク／作 湯浅芳子／訳 L・スズマーン／さし絵
岩波書店 1972 254p 1,900円

森は生きている



気まぐれな女王が大晦日だというのに、4月に咲くマツエキソウが見たいとおふれを出した。褒美のほしい継母と姉嬢は、優しく働きの継娘を雪の降りしきる森へ放り出し、花を摘ませようとする。暗い森の中で道に迷った継娘は凍えて眠りそうになった時、速くにあかりを見つける。それは、年に1度、大晦日の晩に集う1月から12月までの月の精たちが明むき火の尖だった。

月の精たちが杖を受け渡ししながら次々に季節を変化させていく情景は、読み手の想像力をかきたてる。女王と家来たちの風刺の効いた話も楽しい。詩人であるマルシャークがスラブの伝説を戯曲化したもの。

『やぎと少年』

I・B・シンガー／作 工藤幸雄／訳 M・センタク／絵
岩波書店 1979 134p 2,000円



天国に行きたい病にかかった根っからのなまけ者の男の話「つくりものの天国」、寝ているうちに足がもつれあって誰の足かわからなくなってしまう4人姉妹の話「もつれた足とまめけな花婿」、大切に飼っていたヤギを売らなければならなくなった少年の話「やぎのズラチー」他、悪魔が登場する怖い話、間抜けでこっけいな人たちの話等、7つの短編を収録。作者が幼い頃、祖母や母から聞かされたユダヤの昔話をもとにした物語は、どれも生きることの意味を深く考えさせる。作者と同僚の画家センタクが描いた17枚の挿絵もお話の雰囲気にとりあっている。

『幽霊を見た10の話』

フィリパ・ヒラス／作 高杉一郎／訳 ジャネット・アーチャー／さし絵
岩波書店 1984 210p 2,200円



ある嵐の晩、激しい雨風の中、父が水門を開くのに悪戦苦闘していると、もうひとり影の人物が、父を支えたり、力を合わせて持ち上げたり、一緒に作業していた。それは、戦場にいるはずの兄だった……。この「水門で」の他、「影の檻」や「ミス・マウンテン」等、私たちが日常の暮らしの中で感じる、悲しみ、恐れ、つらさ等の感情が、不思議な力となって引き起こす超自然的な出来事をもった10の短編が収録されている。単なる幽霊話ではなく、人の温かさや人生の陰影をも感じさせる作品集。

『床下の小人たち』

メアリー・ノートン／作 林吉吾／訳 ダイアナ・スタンレー／さし絵
岩波書店 1969 246p 2,200円 (小人の冒険シリーズ)



編み棒をなくしたケイトにメイおばさんが「借り暮らしの人」たちの話をしてくれた。安全ピンや鉛筆、マッチ等の小物がなくなるのは、この〈ちいさい人たち〉の仕業だというのだ。これは、おばさんの弟が20年も前に出会ったという借り暮らしのポッド一家のお話。——イギリスの田舎の古い家の床下で、一家は人知れず静かに暮らしに暮らしていた。一人娘のアリエッタは、両親が人間に〈見られ〉ることを恐れ、床下の暮らしを頑なに守ろうとすることが不満だった。外の世界に憧れるアリエッタは、父親に連れられ、初めて床下から太陽の下へ出た日、人間の男の子と出会い、自分たち借り暮らしのことを話してしまう。

半世紀以上に渡って読み継がれているファンタジーの傑作。吸い取り紙はじょうたんに、切手は壁紙に、マッチの箱はたんすに、軸はスリーブを温めるたきぎにと、小人たちが人間の道具を使いこなす様子が細部まで目に見えるように描き込まれ、自分のすぐ近くにも小さな人たちが暮らしているかもしれない、否応なしに想像力を刺激される。続編には、床下を追われ野外で生活する一家を描いた『野に出た小人たち』の他、「川をくぐる——」「空をとぶ——」「——の新しい家」がある。



いしあみつけど!

小学校4～6年生



生駒市図書館